

カンボジアで感じたこと

北海道大谷室蘭高等学校

Honoka Y.

第6回高校生カンボジア スタディツアー



7/30 から 8/6 までの 1 週間、第6回高校生カンボジアスタディツアーに参加しました。在カンボジア日本国大使館、UNESCO プノンペン事務所、トゥールスレン博物館、国立博物館、キリングフィールド、日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所、寺子屋、アンコール・ワット、アンコール・トムなどに行き、カンボジアの歴史や日常、教育への取り組みを学びました。

参加したきっかけ

私の学校はボランティア活動の参加を促進するために ESD パスポートを配布しています。ESD パスポートと出会いユネスコの世界寺子屋運動の募金活動に参加しました。そこで、実際の寺子屋の様子や活動を知りたいと思ったのがきっかけの 1 つです。また、高校 2 年生の時に受けた「世界一大きな授業」もきっかけの 1 つです。文字の読み書き、計算のできない人が世界にはたくさんいることを知り、自分自身には何ができるのか、カンボジアの人々が何を求めて、何を伝えてほしいのかを知りたいと思い参加しました。

寺子屋運動

～教育の大切さ、喜びを知る～



8月3日、日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所、チョンクニア寺子屋、リエンダイ寺子屋に訪問させていただきました。そこでは、寺子屋運動が「教育、生活の質の向上の鍵」になっていることがわかりました。カンボジア全体の非識字率は2008年の32%から現在は16%まで減少しています。寺子屋の活動としては、①コミュニティ幼稚園プログラム(初等教育への橋渡し役を果たし、ドロップアウト率の低下を目指す)、②収入向上プログラム(人々の収入を向上させるための技術訓練をし、生活の質の向上を図る)、③識字クラス(衛生、ジェンダーなどのライフスキルを学ぶ教材を使い同時に読み書きのトレーニングをする)、④復学支援プログラム(ドロップアウトしてしまった子供に教育を再び受ける機会をつくる)、⑤栄養プログラム(月2回、モチベーションを高める、しっかりとした栄養を摂ることを目的とする)、⑥人材育成(地域での教育活動の継続を目指した教員や運営者の育成)があることがわかりました。

このようなプロジェクトを続けることで、教育の大切さを知り、カンボジア全体が自発的に学ぶことができると思いました。また、支援もコミュニティが自立できるような支援が大切だと感じました。チョンクニア寺子屋、リエンダイ寺子屋の2軒の寺子屋に行き、見学、交流をしましたが、そこから、カンボジアの子供達が学びたいという意欲が伝わってきました。

また、交流の時間、折り紙、ぶんぶんゴマを一緒にやった際に、子供達がとても楽しそうに遊んでくれたことが印象に残っています。言葉は互いに通じず、ガイドさんを通さなければ、会話はできませんでしたが、表情や伝えたいという気持ちでなんとなくお互いの伝えたいことが感じることができました。大事なものは、心と心で通じ合うことだと感じました。「学ぶことの喜び」、「何のために学ぶのか」、「コミュニケーション」を考えるきっかけになり、日本にいたら考えることのない、学ぶことの楽しさや大切さ、自分自身の今までの取り組みの情けなさを感じる事ができました。

～世界遺産から学ぶ～

8月4日、世界遺産のアンコール・ワット、スバエクトムの鑑賞に行きました。

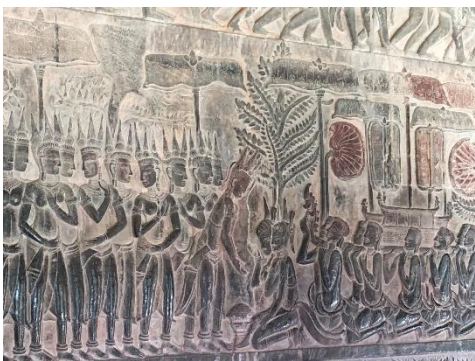
アンコール・ワットは、カンボジアの象徴でカンボジアの人々にとってとても貴重な存在であることがわかりました。とても大きく緻密な建築物を作る技術がカンボジアにはあり、間違いなく先進国だったのだらうなと感じました。現在、アンコール・ワットの修復のため世界各国の国々が協力しています。国によって修復のレベルが違う現状がありますが、委員会の会議を通してレベルを合わせています。

スバエクトムは影絵芝居をするカンボジアの伝統芸能、世界無形文化遺産です。

内戦の影響で一時は継承ができなかった状況でしたが、ティー・チアン座によって、1997年に復活し、現在は日本のKDDIが支援した舞台で活動を行っています。

8月5日、アンコール・トムで世界遺産を学ぶための塗り絵プロジェクトに参加しました。しかし、実際に遺跡を見たことがない、知らないという子供達が多い現状があります。カンボジアの未来を担う子供達が遺跡のことを学び、世界遺産の偉大さと、守り続けることの大切さに気づくことができれば、カンボジアの未来もより一層輝かしいものになるのではないかなと感じました。

伝統、文化を継承していくことは、国自体を1つにまとめる役割があり、重要なことだとわかりました。また、修復作業などで支援しながらも、その国の文化、歴史を知る事ができるので、相互理解にも繋がり、世界も1つにしていける力があると思いました。



カンボジアの現状

カンボジアでは「教育は必要ない」という概念から、「教育を受けさせたい」という概念に変化してきています。そんな中、労働や貧困など様々な背景があり、寺子屋にも通うことのできない子がいます。そこで私は寺子屋を建て教育を受ける機会を作ること大切だと思いましたが、実際、本当に必要な支援とは何なのかを考える必要性があると感じました。

また、教育、経済の地域格差がとても大きいと感じました。農村部では、物乞いをする人がいました。しかし、都市部の人はその現状を知らないのがカンボジアの現実です。地域活性化を政府は問題視をしていますが、財政的に地方を活性化できず、まだまだ厳しい現状にあるそうです。家庭訪問をさせていただいた家庭は、箒作りを仕事として収入を得ています。しかしその箒は1本10円程度で売られます。この家庭の収入は月80ドルです。カンボジアの最低賃金130ドルに比べてもかなり貧しい生活をしています。

この地域格差を解消するにはどうしたらよいのか考える必要があると感じました。

カンボジア

人気スポーツ！！

1位 バレーボール

2位 サッカー

街中を歩いている人を見ると、ACミラン、バルセロナ、レアルマドリッドなどのサッカークラブチームのレプリカユニフォームを来ている人がたくさんいました。

また、カンボジアで有名なサッカー選手は久保建英選手だそうです。

セントラル・マーケット

プノンペンには、様々な市場がありますが、その中でも最大規模を誇っているのが「セントラル・マーケット」です。1930年代に建設されたため、深い歴史があります。様々なジャンルのお店が集まっており観光客も多くいました。私はそこで、カンボジアでは貴重なタンパク源とされているコオロギやタランチュラを食べました。



感じたこと

私は生活する上で便利な物がたくさんあり、不自由なく生活できることが幸せであると思っていました。しかし、カンボジアへ行き、カンボジアの人は経済的に貧しくてもみんな幸せそうで、カンボジアの人々は家族、友人がそばにいること、みんなでご飯を食べること、誰かのために学ぶことなど、人と人の繋がりから心の豊かさが生まれ、それが幸せなことだと感じていると思いました。

私自身もそのような姿を見て、幸せとは心の豊かさのことなのだと感じる事ができました。

また、自分自身の今までの取り組みの甘さや情けなさを感じました。

自分自身を見つめ直し、人として成長するために今までの取り組みを変え、今という瞬間を全力で楽しみながら生きていきたいと思いました。

なので、皆さんにも幸せとは何かを考えてほしいと思いました。

考えることで、本当に必要な支援の形や、未来が見えてくるのではないのでしょうか。

このカンボジアスタディツアーは、自分自身を見つめ直すきっかけになりました。

些細なことにも感謝して生活したいと思います。

